

2-5 岡崎城跡の現状

(1) 発掘調査

岡崎城跡の発掘調査は、三河武士のやかた家康館の建設に先立ち、昭和55年に二の丸御殿跡において本格的な調査を行ったのが端緒となり、史跡内での現状変更等に伴う発掘調査の他、市史跡指定地外も開発に先立つ発掘調査を実施している。開発や施設整備に先立った発掘調査が主であるが、遺構の遺存状況等についての情報が蓄積されつつある。

表2-4 岡崎城跡発掘調査の実施箇所

調査地点		調査時期	調査結果概要	写真
本丸	天守台	平成7年	武者走り上に目地を漆喰塗した敷石確認、立葵文・ おもだか 沢瀉文の軒丸瓦出土	①
	辰巳櫓跡	平成12年	櫓台や築地塀基礎と思われる石垣の下段、石組井戸と井戸囲施設の基礎、風呂谷曲輪へと続く玉石積石垣などを検出	②
	龍城神社	平成25年	近世の敷瓦の四半敷き遺構、石列等の中近世遺構を検出	③
	龍城神社	平成26年	近世の瓦溜り、近世以前の土坑、中世以前の遺構面を検出	—
二の丸	二の丸御殿	昭和55年	二の丸御殿塀基礎と考えられる石列、石組溝、石組井戸、中世の鍛冶遺構、弥生時代の土坑などを検出	④
		平成6年	瓦溜り、土管、中世の遺物包含層を確認	⑤
	二の丸御殿	平成19・20年	御殿のものと推定される井戸や石列検出	⑥
三の丸		平成18年	石垣、柱穴群、近世沢瀉文の塀瓦の瓦溜りなどを検出	—
		平成23年	石垣、掘立柱建物、弧状の空堀などを検出	⑦
菅生曲輪		平成6年	東西に水堀が走り、堀の南北に武家屋敷が広がること確認	—
		平成12年	南北屋敷地を繋ぐ土橋や屋敷地内の井戸や色鍋島が出土した廃棄土坑などを検出	⑧
		平成14年	石列を検出	—
		平成17・19・20年	菅生曲輪と東曲輪間の堀及び石垣を検出	⑨
	曲輪・枅形・切通し	平成26年	切通し石段、排水溝としての石組み溝、枅形門の石垣基底部を検出	⑩
東曲輪		平成19・20年	東隅櫓の櫓台石垣の一部、切通し下の枅形門の礎石、東曲輪と菅生曲輪間の空堀の石垣などを検出	—
	曲輪・切通し	平成27年	曲輪周囲の石垣、盛土層、柱穴群と切通しから続く通路と石段、排水溝を検出	⑪
白山曲輪	堀	平成23年	堀の肩の位置を確認	—
龍城堀		平成9年	崩落後に積み直された石垣とその胴木、坂谷曲輪南で、杭列及び旧石垣の天端と推定される石列などを検出	—
大林寺郭堀		平成16～18年	堀の石垣などを検出	⑫
		平成19年	犬走りのある野面積みの石垣、道路などを検出	⑬
		平成20年	堀の石垣などを検出	—
石垣石材調査		平成11年	石材岩石等調査	—
石垣基礎調査		平成26年	石垣全体の調査票の作成及び危険度判定	—
菅生川端		平成26・27・28年	菅生川沿いの土塁の確認、横矢枅形を3箇所備えた石垣を確認	⑭



（２）石垣調査

岡崎城の石垣は、築石は花崗岩が大部分を占め、菅生川（乙川）上流の男川水系に分布する領家変成岩類の片麻岩、珪質片岩、ペグマタイトが若干みられる。築石の間の間詰石には、菅生川の川原石や花崗岩の割石が用いられている。花崗岩帯であり石材入手が容易であったことから、五輪塔等の石材の転用は数が少ない。

石垣の調査として、平成10年度に石垣石材のサンプルを採取し、岩石分析を行っている。平成26年度には、石垣調査票（石垣カルテ）を作成し危険度を判定する「岡崎城跡石垣基礎調査」を実施した。

①石垣基礎調査の概要

菅生川右岸の菅生川端石垣を加えた史跡指定地内の石垣を約300地点に分け悉皆的に基礎調査を行い、石垣調査票を作成した。また、^{はら}孕み等の破損状況を目視により観察し、公園内の園路等の利用状態を考慮し危険度を判定している。危険度をA（要検討）、B（要観察）、C（安全）のランクに分類した。平成28年度に危険度A判定の石垣を中心として、早急な対策が必要となる箇所について現状の再確認を行った。危険度A判定が7箇所、また危険度B判定のうち利用状況から危険度が高いと考えられる箇所が5箇所の計12箇所が確認された。詳細は次項以降に記載する。（図2-21 石垣分類図、危険度調査位置図参照）

ア 【No.40】 本丸埋門北側石垣

- ・ 孕み出しや隅石のズレによる築石の間詰石の欠落が見られ危険度A判定である。現状では顕著な変状は見られない。
- ・ 石垣前面はコンクリート舗装の園路で、幅員が約3mと狭くスロープ状であり、歩行者等の通行が多く、本丸の主要動線となっている。



写真 2-13 No.40 石垣

イ 【No.44】 本丸埋門南側石垣

- ・ 石垣調査票では危険度B判定だが、石垣上部に孕み、ズレが見られる。
- ・ 石垣No.40 と対になる石垣で、前面の園路は散策者も多く本丸の主要動線であり、幅員3mと狭い。



写真 2-14 No.44 石垣



写真 2-15 車両通行の状況

ウ 【No.55】 本丸忠魂碑下の風呂谷曲輪石垣

- ・ 伐採木付近がやや孕んでおり危険度A判定である。現状では石垣上部の法面も含め比較的安定した状態と考えられるが、伐採木の根腐れの進行状況の確認が必要である。
- ・ 南側シノギ角付近の石垣天端に伐採木があり、周囲が空洞になっている。この下部の目地にモルタルが充填されているが、排水機能が低下するため、根の除去時に除去する必要がある。石垣上部の法面に、石垣の保存に影響を与えるマツが生育している。



写真 2-16 No.55 石垣



写真 2-17 伐採木根付近の空部とモルタル充填

エ 【No.60】本丸風呂谷門石垣

- ・石垣下半分に孕み出しや石材の一部欠落、間詰石の欠落もあり、危険度A判定である。
- ・下半分は大きめの野面石が用いられる。近世岡崎城の整備時と考えられる貴重な石垣であり、散策者が多く本丸の主要動線の一つである。
- ・石垣天端付近や天端面上に樹木がある。石垣の保存に影響を与える位置にあるので伐採について検討する必要がある。



写真 2-18 No.60 石垣



写真 2-19 築石の欠落箇所

オ 【No.96】本丸御門西側石垣

- ・孕み出しや石材の欠落などから危険度A判定である。石垣下部は欠落部を近代以降に詰めたと推定され、その箇所が孕んでいる。動線から隔離されているため修復の緊急性は低い。
- ・石垣面及び天端面に伐採木が残り、根腐れの進行状況等の経過観察が必要と考えられる。



写真 2-20 No.96 石垣

カ 【No.142】 持仏堂曲輪の帯曲輪石垣

- ・危険度B判定であるが、石垣上部に局所的な孕み出しがあり、持仏堂曲輪の主要動線に面することから、危険度は高い。



写真 2-21 No.142 石垣



写真 2-22 孕み出し箇所

キ 【No.150】 持仏堂曲輪の帯曲輪石垣

- ・石垣上部のマツ大木の影響と考えられる孕み出し等から、危険度A判定である。現状では比較的安定している状態であること、孕み出し箇所の石垣の高さが約 1.5mと低いことから、動線沿いではあるが修復に向けての緊急度は高くないと考えられる。
- ・孕み出し箇所は後世の積み直しと考えられる。孕み出しの原因となっている特徴的なマツの取り扱いの検討が必要である。



写真 2-23 No.150 石垣



写真 2-24 孕み出し箇所

ク 【No.156】 持仏堂曲輪の挑燈檣下石垣

- ・全体的に間詰石の欠落等があることから危険度A判定である。現状は比較的安定しており、動線からは距離があり、上部に建物等はないため緊急度は低い。
- ・石垣天端面は背面石垣と間に小段があり、その小段に土砂が堆積し樹木がある。樹木の伐採の検討が必要と考えられる。



写真 2-25 NO.156 石垣



写真 2-26 石垣天端の樹木

ケ 【No.167】 二の丸の清海堀脇石垣

- ・危険箇所が認識しづらい箇所ではあるが、危険度B判定である。石垣天端面は散策路であり散策者が多いこと、石材の欠落がまとまっていること、またその上部に樹木（エノキ大木）があること等から危険度は高い。

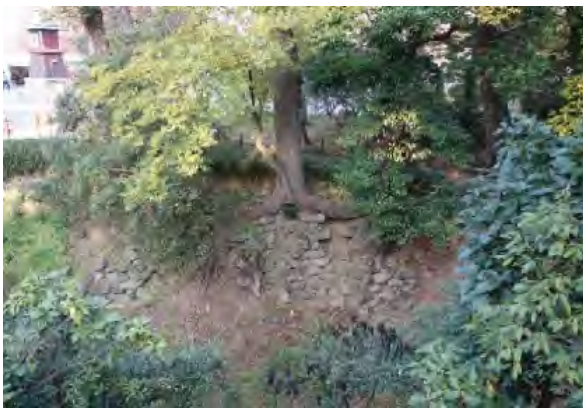


写真 2-27 No.167 石垣



写真 2-28 築石の欠落箇所

コ 【No.176】 風呂谷曲輪の龍城堀石垣

- ・近代以前に出隅部分が崩壊し法面となっており危険度A判定である。現状は石垣及び法面とも比較的安定し、堀に面していることから人的被害の影響は高くないと考えられる。
- ・堀側に大きく傾いている石垣天端の樹木（サクラ）の伐採が必要と考えられる。



写真 2-29 No.176 石垣



写真 2-30 石垣天端の樹木

サ 【No.248】・【No.251】 東曲輪の切通し石垣

- ・石垣調査票では危険度B判定だが、菅生曲輪から東曲輪への主要動線として人々の往来も多く、石垣の浮石、間詰石の抜け、孕みがあり危険度は高い。
- ・切通し通路の付け替え等で、幾度も積み替えが行われてきたと考えられる。しかし、根石部分は当初と思われる石垣が残存している。



写真 2-31 No.248 石垣の抜け石



写真 2-32 No.251 石垣の抜けと孕み出し

②石垣の分類

岡崎城跡の石垣は、天守台を始め本丸及び持仏堂曲輪に野面積み石垣が分布している。本丸御門には本丸の正面虎口を意識した切込接ぎの石垣が築かれている。その他の近世の石垣は、布積み崩しや谷積みの打込接ぎが見られる。(図 2-21)

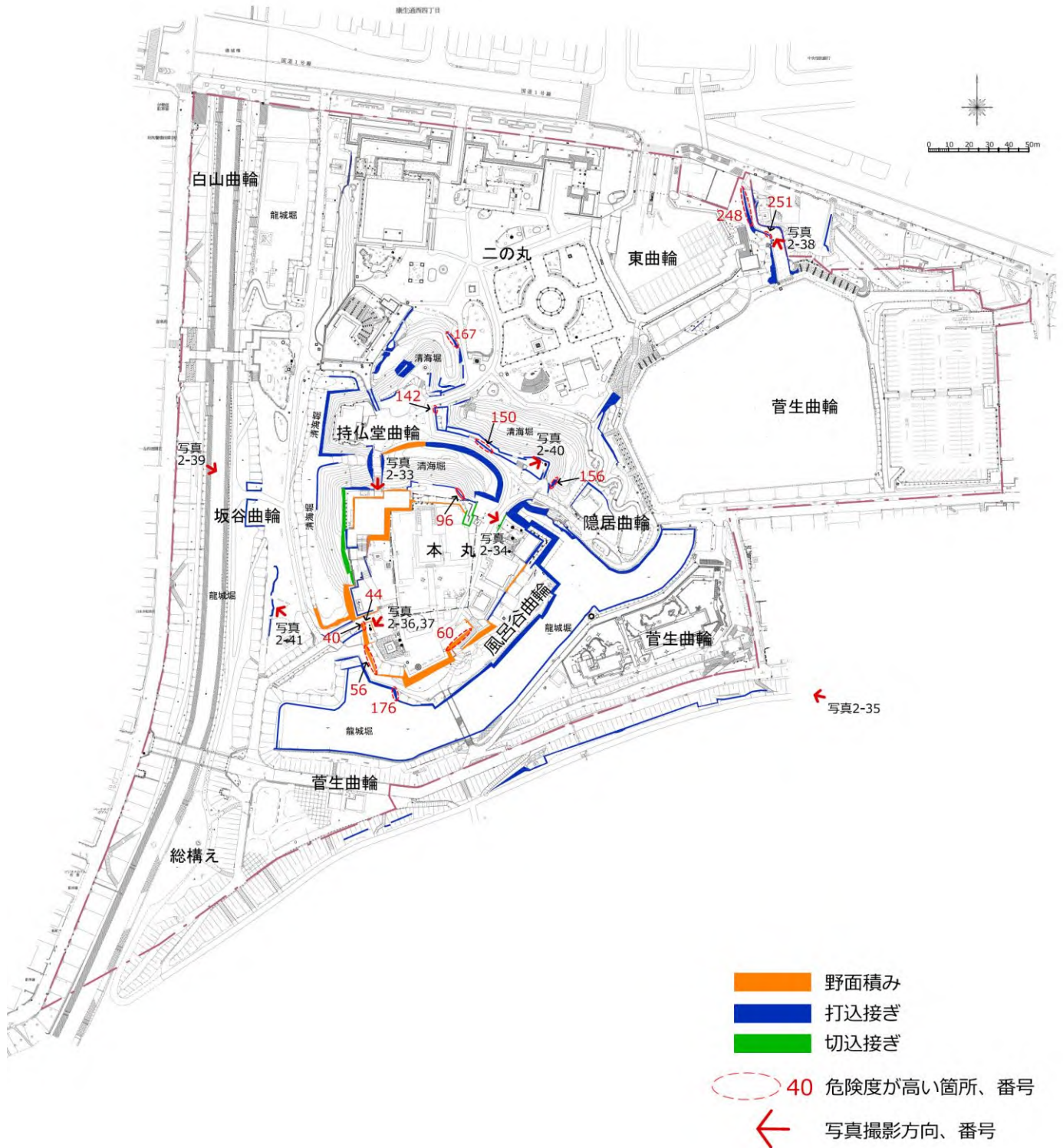


図 2-21 石垣分類図、危険度調査位置図（市史跡指定地）

○天守台石垣

自然石と一部割れた面のある石材を積む野面積みの石垣。天守台の北側に1石と東側に2石の大きな鏡石が据えられている。豊臣家臣田中吉政により岡崎城に石垣が導入された際の石垣遺構と考えられ、付櫓をもち、天守台下にL字形の腰曲輪が巡る点で豊臣大坂城の天守台と相似形であり、その姿を残す遺構として貴重である。



写真 2-33 天守台石垣の野面積みと鏡石

○本丸御門石垣

石材の全面を加工し、築石と築石の間をすき間なくはめ込み積み上げた切込接ぎの石垣。石の面（表面）は、ノミによるすだれ仕上げが施される。城内で形や大きさの異なる石材をモザイク状にはめ込んだ切込接ぎの石垣はここだけであり、本丸の正門にふさわしい丁寧な積み方となっている。



写真 2-34 本丸御門石垣の切込接ぎ

○菅生川端石垣

菅生川（乙川）河川堤防に全長約 400 mが確認され、現存する一連の石垣城壁としては日本最長級の延長の石垣。3箇所もの横矢枡形が張り出すのは岡崎城のみの特徴である。岡崎藩3代藩主・本多忠利により、寛永年間(1624～43)に築造が始まり、正保元年(1644)に完成した記録がある。舟から見る岡崎城の視覚的効果を高めており、徳川系城郭の築城思考が現れた石垣となっている。



写真 2-35 菅生川端石垣

○本丸埋門

本丸の搦手となる低地の坂谷曲輪へ向かう門の石垣である。両側の袖に、埋門の桁を載せるために石材を切り欠いた加工痕が残されている。また、「卍」「井」の刻印が見られる石材がある。現在、外側の枳形部分は埋め立てられ、かさ上げされている。



写真 2-36 本丸埋門石垣の刻印と桁



写真 2-37 埋門の桁の欠き込み加工痕

○東曲輪の南（東）切通し

段丘の丘陵を切断する中世の空堀（堀切）を、近世以降に石垣を構築し切通し道に改修したと考えられる。両側に石垣が積まれ細く折れ曲がることで見通しを遮り、防御の工夫がされている。近世には、切通しの下部に枡形が備えられ、番所が置かれていた。後期には、隣接する東曲輪に樹木がうっそうと茂り、化け猫伝説が生まれるほどであった。発掘調査で、約半間（約 90cm）毎に石段が確認されている。



写真 2-38 切通しと石段

○坂谷門の枡形

坂谷曲輪から白山曲輪への西へ向かう虎口に、西の丸馬出しと共に整備された。枡形には、南多門（櫓門）と冠木門（高麗門または薬医門）が構えられていた。

岡崎城の搦手方向の矢作川や東海道二十七曲りから見た場合、本丸の天守前に構えられた丸馬出しと枡形をもつ坂谷門が、堅固な守りと均整のとれた城郭の姿となっていた。



写真 2-39 坂谷門の石垣と天守

○土塀基礎石（持仏堂曲輪・坂谷曲輪）

持仏堂曲輪の帯曲輪の東側では、外側の土塁上に土塀の基礎石が残っている。また、坂谷曲輪の坂谷門に続く土塁の南側、及び龍城堀に面する南縁辺にも土塀の基礎石が列をなしている。



写真 2-40 持仏堂曲輪の土塀基礎石



写真 2-41 坂谷曲輪の土塀基礎石

（3）岡崎公園の樹木

①概要

平成 27 年度に行った岡崎公園樹木調査によると、高木は約 1,500 本となっており、その構成では落葉樹が 44 種（60%）、常緑樹が 43 種（40%）であり、落葉樹がやや優先している。種類別ではソメイヨシノが全体の 22%と最も多く占め、次にイロハモミジが 16%、クロマツ 8.9%、ヤブツバキ 6.2%、ムクノキ 5.8%、イチョウ 5.4%、クスノキ 3.5%と続いている。

低木類は約 4,100 株を数え、その中で常緑樹が 31 種（70%）、落葉樹が 10 種（30%）と種類並びに本数も常緑樹が優先している。種類別に見るとツツジ類（ヒラドツツジ、リュウキュウツツジ等）が 53.6%と全体の半数を占め、ユキヤナギ 10.8%、カンツバキ 6.5%と続く。

大正 6 年に本多静六博士が行った公園設計（植栽）案は、大正 9 年に本丸や隠居曲輪、あるいは東曲輪の一部に植樹された記録が残る。この時の樹木はほぼ残っていないと思われるが、現在も見られるクロマツ、クスノキ、サクラ、並びに低木のツツジ類は設計意図を継続しているものと思われる。（資料-26～31）

②樹木の特徴

樹木の種類や形状、あるいは堀や石垣、並びに土塁等での樹木の立地状況を分析し、その特徴を曲輪別にまとめると表 2-5 のようになる。

また曲輪内には堀、石垣、土塁等の遺構があり、そこに樹木が生育している。そこで樹木の位置を分類化（図 2-22）し、各々の立地特性を曲輪別に集計（表 2-6）した。

表 2-5 曲輪別に見た樹木の特徴

曲輪名	樹木の特徴
本丸	曲輪内はクロマツの大木が残っている。(写真 2-42) 清海堀の土塁や石垣の表面及び天端等にはイロハモミジ、ムクノキ、ヤブツバキが多くあるが、そのほとんどは実生木と推定される。(写真 2-43) 一方、その根が石垣や土塁に影響を及ぼすと共に、石垣や土塁への通景（見通し）を阻害している要因となっている。(写真 2-57)
持仏堂曲輪	曲輪内は石垣上面を中心にクロマツ、タブノキがある。(写真 2-44) 清海堀の土塁や石垣表面及び天端にはイロハモミジ、ムクノキ、ヤブツバキが多くあるが、そのほとんどは実生木と思われる。 また本丸同様に、その根が石垣や土塁に影響を及ぼすと共に、石垣や土塁への通景を阻害している要因となっている。(写真 2-56) 帯曲輪沿いの石垣天端ではクロマツ、クスノキが大木化し、その根が石垣へ影響を及ぼしている。
風呂谷曲輪	曲輪の龍城堀沿いにはクロマツの大木が残る他、イロハモミジ、ソメイヨシノが優先している。(写真 2-45) 石垣表面及び天端にはイロハモミジが生え、石垣に影響を及ぼしている。
坂谷曲輪	曲輪内はクロマツやクスノキの大木が多く残る。(写真 2-46、2-52) その他イロハモミジもあり、また伊賀川左岸沿いにソメイヨシノも見られる。
二の丸	イロハモミジ、クロマツ、ソメイヨシノが多くあるが、全部で 53 種に及ぶ樹木があり曲輪の中では最も種類が多い。(写真 2-47) 曲輪西側（坂谷曲輪沿い）の土塁にはイチョウが大木化して残るが、樹木の根が土塁に損傷を与えていると共に、土塁への通景を阻害している要因ともなっている。
菅生曲輪	曲輪の北東側にある多目的広場南側にはイチョウの並木がある。(写真 2-48) 龍城堀南側の石垣天端に、クスノキの大木やタブノキがある。堀にかかる神橋の両側に植えられたクスノキも大径木となっている。 曲輪の南側では、明治 36 年以降植樹されたサクラ（ソメイヨシノ等）が、菅生川（乙川）、伊賀川堤防沿いを中心に約 350 本あり、近代より長く花見の名所を構成している。(写真 2-53) 菅生川沿いの市指定天然記念物である五万石ふじの藤棚にも花見客が多く集まる。五万石ふじにちなみ、市の花がふじとなっている。(写真 2-50)
東曲輪	中央部は駐車場が占めているため、周辺部にクスノキの巨木が残る他、東隅櫓北側にソメイヨシノが数本しかなく種類や本数とも少ない。(写真 2-54)
隠居曲輪	二の丸へと続くスロープ園路沿いに、梅林がある。(写真 2-49) 曲輪の東側にはメタセコイアの並木がある。(写真 2-48)
白山曲輪	伊賀川右岸沿は、長年に渡り植樹されたソメイヨシノで構成されている。(写真 2-51)
総構え	伊賀川最下流部並びに菅生川右岸は、植樹されたソメイヨシノが主体を占め、またクロマツも多くある。(写真 2-55)

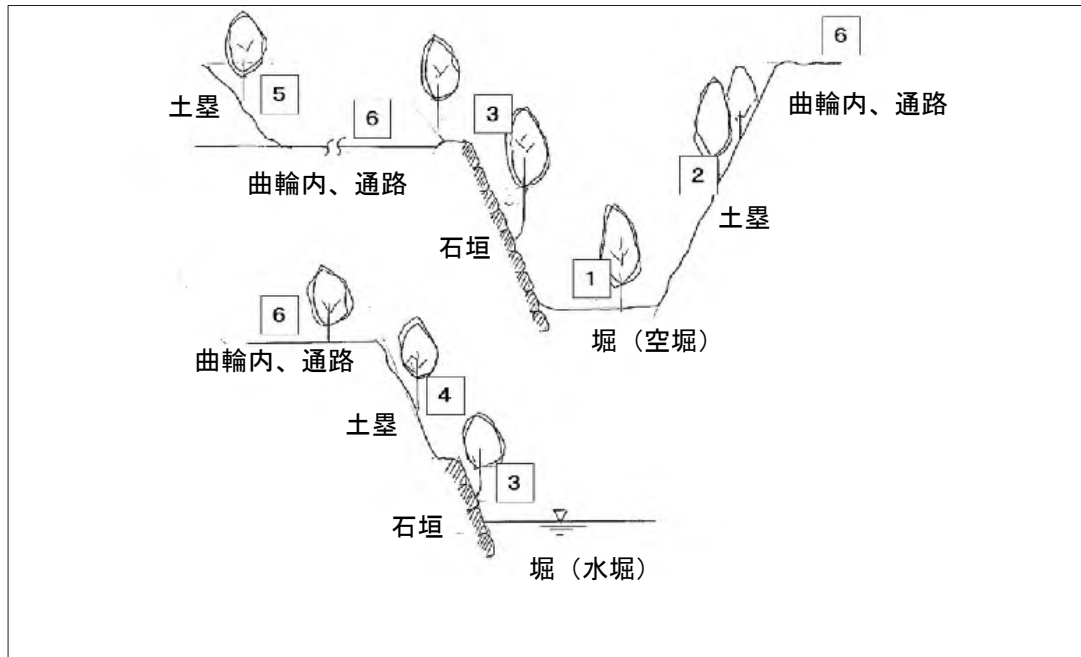


図 2-22 高木立地特性模式図

表 2-6 曲輪別高木立地特性（岡崎公園）集計表

立地特性	本丸	持仏堂曲輪	風呂谷曲輪	坂谷曲輪	二の丸	東曲輪	菅生曲輪	隠居曲輪	白山曲輪	総構え	計	構成比(%)
1 堀底(空堀)	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0.20%
2 堀(堀底)に続く土塁、法面	127	119	1	13	36	0	14	1	0	0	311	20.87%
3 堀底に続く石垣、及び石垣天端	42	45	20	11	7	4	31	12	0	0	172	11.54%
4 石垣に続く土塁、法面	0	16	0	0	0	0	0	0	0	0	16	1.07%
5 平坦部に続く法面	25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	25	1.68%
6 曲輪内、通路沿い等	82	64	40	201	232	4	150	16	74	100	963	64.63%
計	276	247	61	225	275	8	195	29	74	100	1,490	100.0%
構成比(%)	18.5%	16.6%	4.1%	15.1%	18.5%	0.5%	13.1%	1.9%	5.0%	6.7%	100.0%	



写真2-42 クロマツ高木樹（本丸南側）



写真2-43 本丸土塁上の樹木
(本丸土塁・清海堀)



写真2-44 クロマツ高木樹（持仏堂曲輪）



写真2-45 石垣天端沿いのクロマツ、
イロハモミジ等（風呂谷曲輪）



写真2-46 クロマツ、クスノキ高木樹
(坂谷曲輪)



写真2-47 イチョウ、クスノキ、ムクノキ等
の樹木群（二の丸花時計付近）



写真2-48 多目的広場周辺のイチョウ、
メタセコイア（菅生曲輪・隠居曲輪）



写真2-49 スロープ沿いの梅林
(隠居曲輪)



写真 2 -50 五万石ふじ
(市指定天然記念物・菅生曲輪)



写真 2 -51 伊賀川沿いのサクラ
(白山曲輪)



写真 2 -52 往時の代表的な樹木クロマツ
(ふるさとの名木・坂谷曲輪)



写真 2 -53 ソメイヨシノの老木
(菅生曲輪 城南亭沿い)



写真 2 -54 曲輪周囲のクス、サクラ
(東曲輪)



写真 2 -55 土塁上のクロマツとサクラ
(総構え)



写真 2 -56 石垣に生育するカエデ
(持仏堂曲輪石垣・清海堀)



写真 2 -57 堀底から続く土塁の樹木
(本丸土塁・清海堀)



図 2-23 高木樹木撮影位置図（市史跡指定地）

(4) 景観特性

①岡崎城の景観

城郭、特に天守からの眺望は敵の到来を防ぐために重要であった。河岸段丘の先端に位置する龍頭山を選地した岡崎城においても天守から周囲に眺望が効き、河川の舟運、城下町や街道の往来を見晴らすことができた。

天守を見上げる眺望を意識した景観も重要である。江戸時代に描かれた浮世絵の中には、岡崎城と矢作橋を西側から見た構図が多い(図 2-24)。京より東海道を下ってくると、桑名城の次に現れる大きな城は岡崎城であり、当時東海道一の長さを誇った矢作橋と相まって三層三階の複合天守の威容は、当時の人々に強い印象を与えたことであろう。

現在、都市の中央に存する緑豊かな岡崎城は、名鉄名古屋本線・国道1号・国道248号など各所から眺めることができるランドマークとなっている(写真 2-58、2-67)。菅生川(乙川)と水辺の緑に彩られる岡崎城の姿は、都市の中で安らぎを与えてくれる景観として岡崎の象徴的風景である。また、菅生川端石垣が発掘調査により高さ約5.4mで累々と川岸に続いていることが確認され、菅生川からの往時の景観復元が可能となった。

菅生川沿いや城下から望む岡崎城は、近隣の高層建築の陰に隠れる箇所もあるため、橋梁からの景観は眺望ラインとして啓発が図られているが、後述の岡崎城の天守が見える眺望線(ビスタライン)や、岡崎城下の伝統産業である八丁味噌の蔵並が続く八帖地区の景観形成重点地区と同様に歴史的景観として天守への眺望を保全していく必要がある。



図 2-24 浮世絵に描かれた岡崎城
(歌川広重 東海道五十三次 岡崎)



写真 2-58 菅生川(乙川)殿橋からの景観

②徳川家菩提寺の大樹寺からの眺望

岡崎城の特殊な景観として、徳川将軍家の菩提寺である大樹寺(鴨田町)の本堂から岡崎城の天守が見える眺望線(ビスタライン)(図 2-25、2-26)がある。大樹寺は、3代将軍徳川家光の命により家康十七回忌を機に寛永18年(1641)に大方丈・総門・三門等の伽藍が建造された。菩提寺を城の周囲に配置することは他の城郭でもみられるが、岡崎城と大樹寺のような例は少ない。大樹寺総門の先に望む天守の景観(写真 2-65)は額縁の絵のようであり、この歴史的景観を守っていくことが、昭和63年9月に策定された「都市景観環境基本計画」

の中で明示された。更に、「岡崎市水と緑・歴史と文化のまちづくり条例」（平成15年）に基づき平成24年2月に策定された「岡崎市景観計画」により、「大樹寺から岡崎城への眺望景観形成重点地区」に指定され、ビスタラインの保全が図られる他、普及啓発活動が進められている。

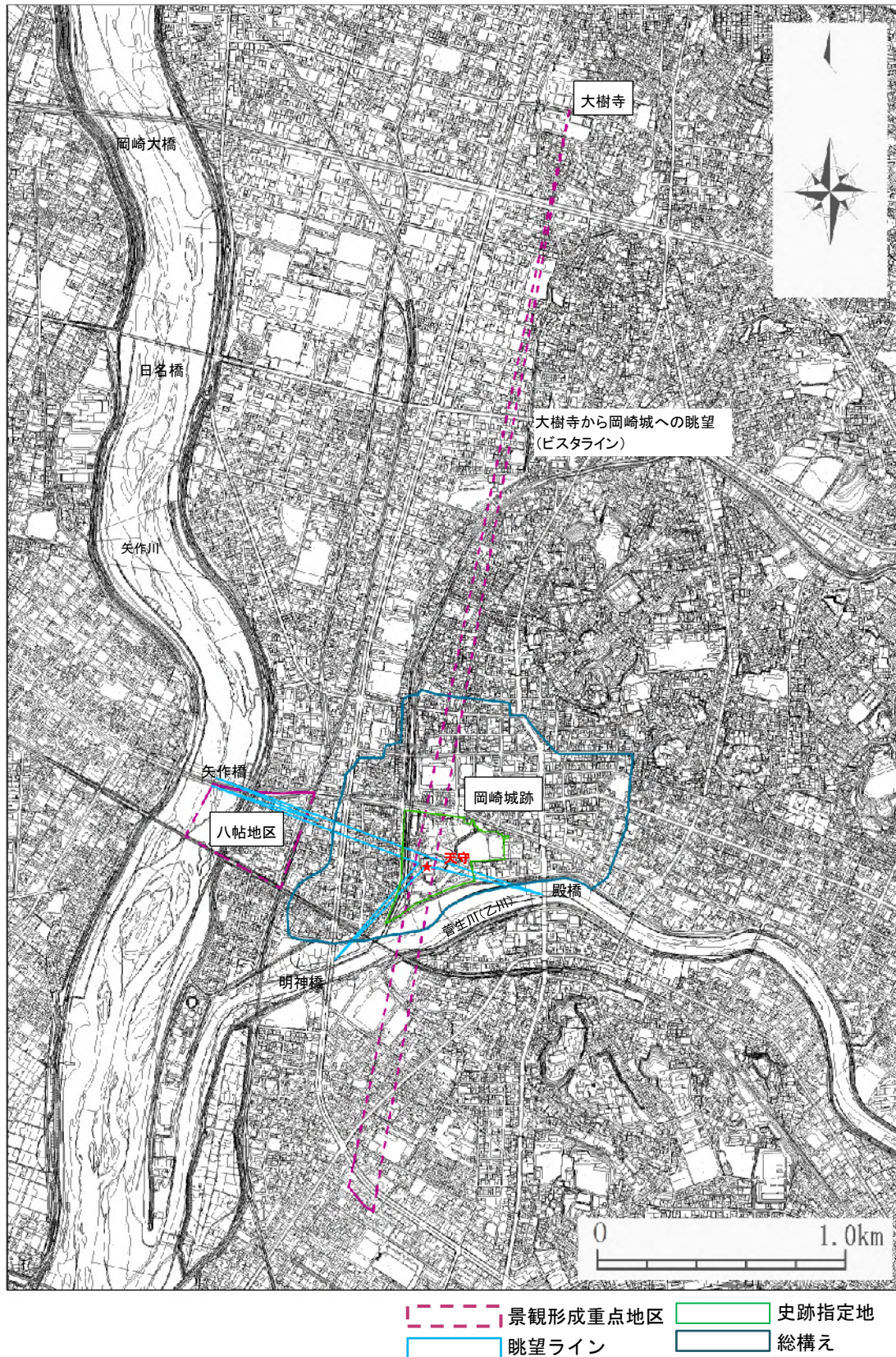
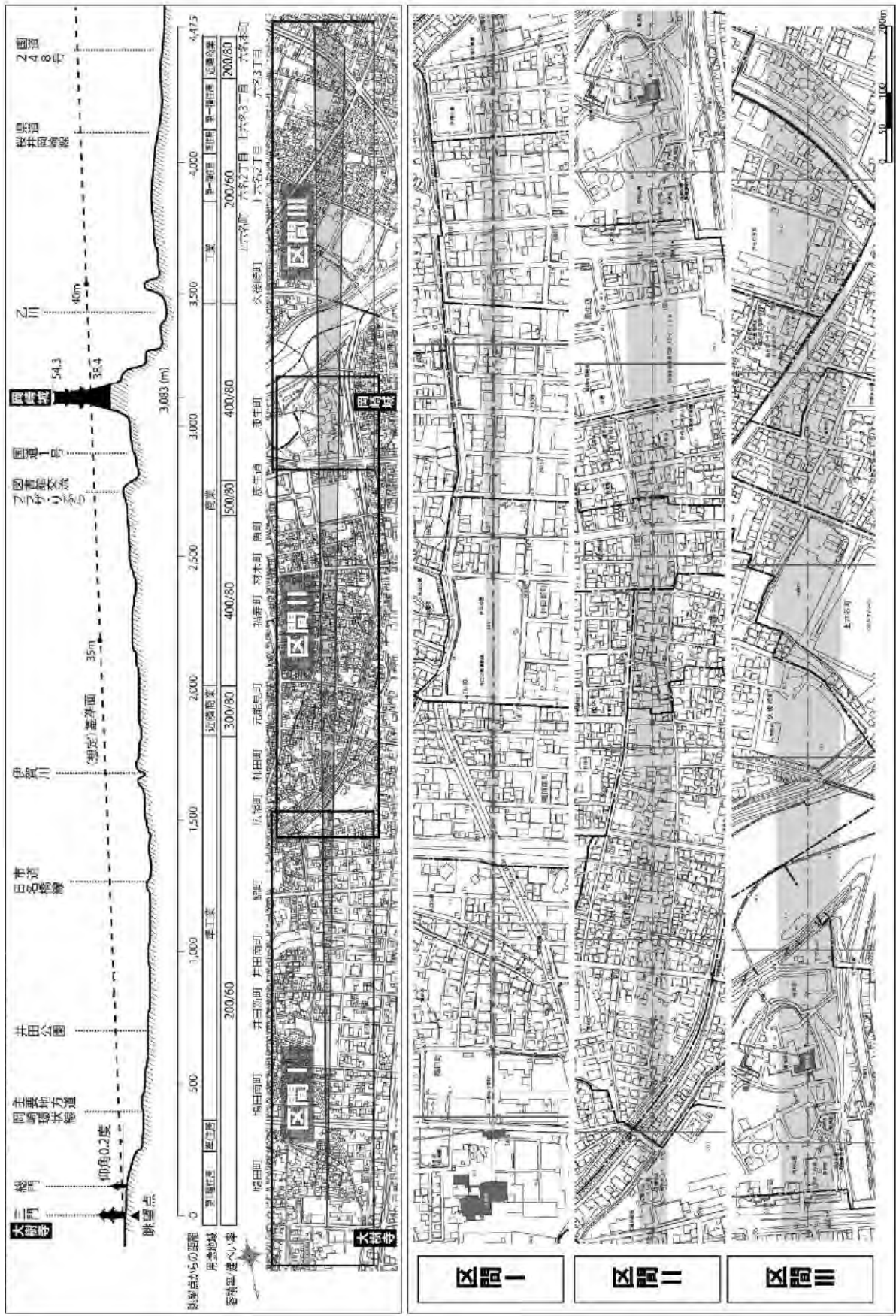


図 2-25 岡崎城跡と景観形成重点地区



③史跡指定地内の景観特性

史跡指定地である岡崎公園内の景観のうち、地上に露出し見ることのできる堀・石垣・土塁・井戸等の遺構の組み合わせによる以下の部分などは中世・近世の景観を良く残している。

ア 二の丸から持仏堂曲輪、本丸への通路部分と清海堀

築城以来の空堀を核とし、二重の幅の狭い空堀や細い帯曲輪、馬出しを複合した中世の縄張りの特徴が残る。内側空堀の凹曲面を描く片側石垣は、中世から近世初頭の築城過程が重層的に表れている。

イ 菅生曲輪から三の丸への南（東）切通し

段丘の丘陵を切断する南（東）切通し道は、両側に石垣が積まれ折れ曲がる防御の構造を示す。

ウ 風呂谷曲輪から月見櫓跡への石段

屈曲の多い本丸外縁を固めた近世初頭の野面積み石垣が残されている。

エ 坂谷門跡

元は堀に面し、丸馬出しと共に天守西側からの均整の取れた城郭の姿が想起できる。

オ 持仏堂曲輪から天守へ渡る廊下橋跡

天守から直接、本丸外の曲輪へ通じる廊下橋は岡崎城の特色の一つとなる構造である。

カ 龍城堀の石垣

水堀周囲の風呂谷曲輪を巡り本丸石垣と二段構えの石垣を構築し、隠居曲輪外縁は曲線を描く石垣となっている。



写真 2-59 清海堀



写真 2-60 南（東）切通し



写真 2-61 風呂谷曲輪からの石段



写真 2-62 坂谷門跡



写真 2-63 廊下橋跡



写真 2-64 龍城堀の石垣

④天守から周囲への眺望 (写真 2-66)

- 北方面は、徳川家・松平家の菩提寺である大樹寺とその背後に松平氏発祥の地である三河山地を望むことができる。[写真 2-66 03, 04]
- 北から東方面では、高層建築が眺望の阻害要因となっているが、天守を先端とし鬼門にあたる社寺が建てられている丘陵のラインを望むことができる。[写真 2-66 04]
- 南から西方面は、菅生川や伊賀川が存在で、十分な眺望が確保でき、矢作川や岡崎平野の低地を広く眺めることができる。[写真 2-66 07, 08]

⑤総構え付近から天守への眺望 (写真 2-67)

- 菅生川や伊賀川河畔、殿橋や吹矢橋から、また、名古屋鉄道の菅生川及び矢作川に架かる鉄橋から望むことができる。河川と一体となった、自然的・歴史的な眺望となっている。[写真 2-67 01, 02, 04, 06, 07, 08]
- 国道1号等に架かる歩道橋からも望むことができる。[写真 2-67 03, 09, 10]



写真 2-65 大樹寺総門越しに望む天守の
景観 (ビスタライン)

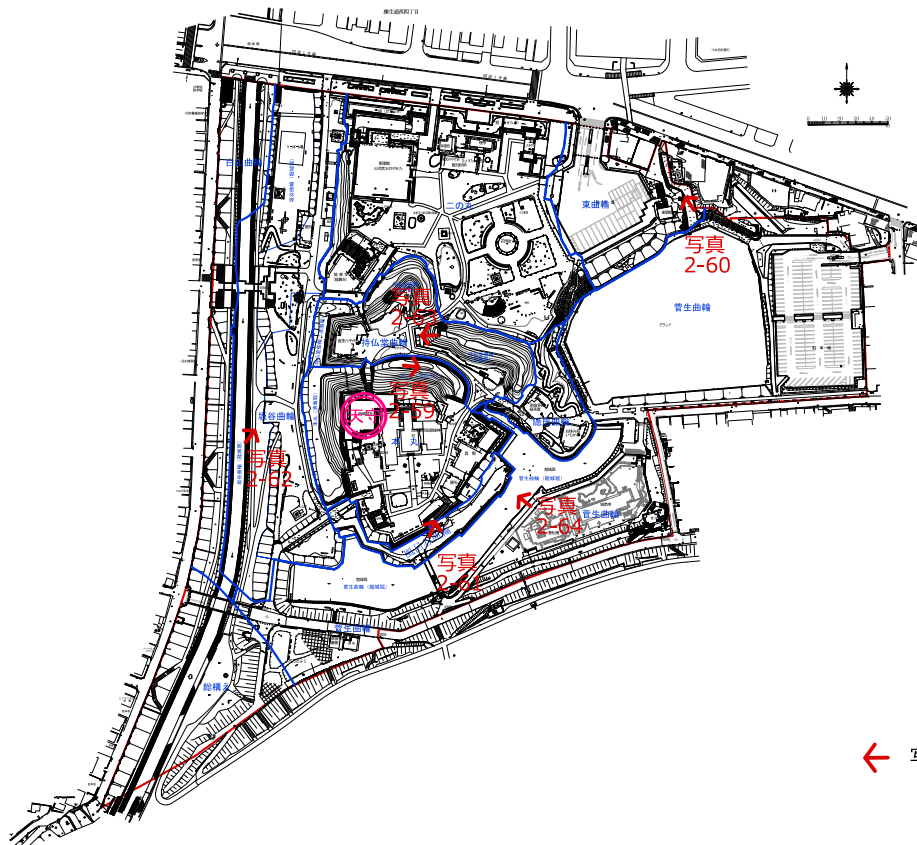


図2-27 写真撮影位置図（市史跡指定地）

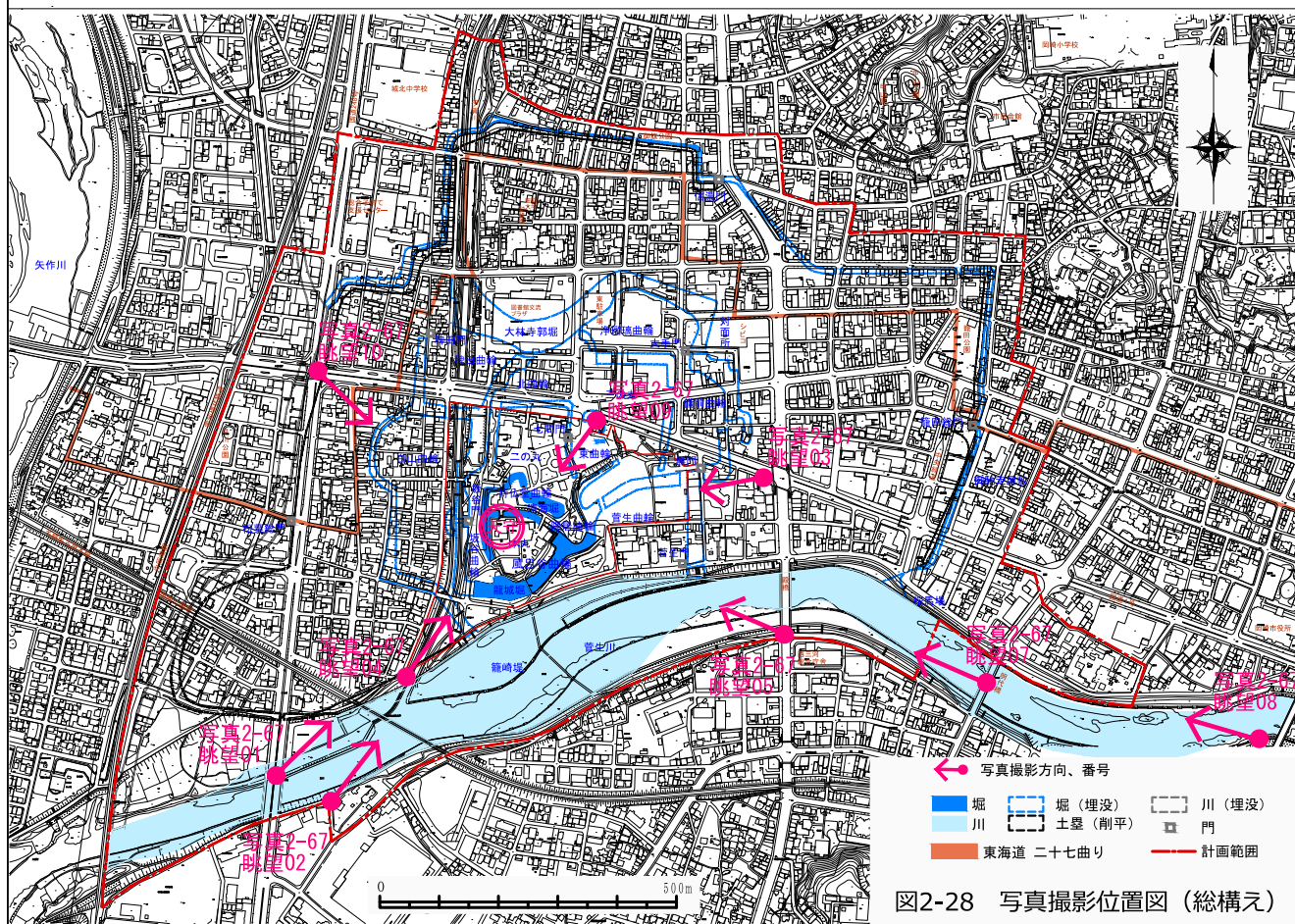


図2-28 写真撮影位置図（総構え）



01 天守より西方向



02 天守より西北方向



03 天守より北方



04 天守より北東方



05 天守より東方向



06 天守より東南方向



07 天守より南方向



08 天守より南西方向

写真 2-66 天守から周囲への眺望



01 明神橋（中央）より望む



02 菅生川左岸（三嶋神社）より望む



03 康生通南歩道橋より望む



04 伊賀川左岸下流より望む



05 殿橋（菅生川左岸側）中央より望む



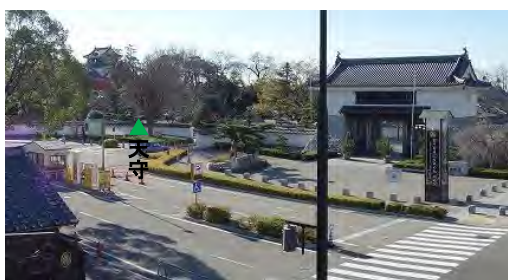
06 人道橋予定地（桜馬場南）より望む



07 明代橋（菅生川）より望む



08 吹矢公園（菅生川左岸）より望む



09 岡崎公園前歩道橋より望む



10 八帖交差点の歩道橋より望む

写真 2-67 総構え付近から天守への眺望

2-6 岡崎城跡の価値

(1) 岡崎城の特性

①中世城館を核とし近世城郭の各時期の特徴が見られる城郭

○徳川家康生誕の城・天下統一の足固めの城

岡崎城跡は、三河の国人領主の子から征夷大將軍となり、江戸幕府を開いた徳川家康が誕生した城であり、永禄3年(1560)桶狭間の戦い直後に城主として独立し、三河国を押さえ天下統一への基礎固めの本城とした城である。

○中世城郭の到達点

岡崎城跡は、西郷氏による龍頭山での築城当初(居館としての当初の岡崎城は菅生川の対岸の明大寺とする説が有力)の15世紀半ば以後、松平清康が作り、徳川家康が改修した中世城郭としての整備が行われていく中で、原地形を活かした不等辺多角形の本丸が形成された。

特に、二の丸から本丸へ至る持仏堂曲輪において、重ね馬出しや両側空堀の間を通す細い帯曲輪で構成された複雑な縄張りは、横矢を確実に掛ける土造りの中世城郭の到達点といえる形態となった。

○対峙する勢力が入れ替わりながら前代の特徴を包括し整備された城

天正18年(1590)に家康が関東移封となり、東国の家康に対し東海道の要衝となる城に豊臣家臣が配置される中で、岡崎城跡には近江出身の重臣田中吉政が配されたことにより、織豊系城郭として大改修され、城下町を広く取り囲む総構えの近世大城郭の骨格が造られた。

慶長6年(1601)の関ヶ原の戦いの後、江戸幕府により大坂の豊臣包囲網となる城が天下普請により各地で築かれていった。岡崎城も家康に近い譜代大名として本多家が入城し、再度徳川方の城として豊臣家に対峙する城郭として、内郭と外郭をより強固に整備拡張され、西方の曲輪や石垣が築かれ、枡形門が構えられていった。その後、正保2年(1645)に城主となった水野忠善の代に総構えの両総門が備えられ、近世城郭としての整備が完成している。

本丸と周囲の平面形が曲線を描く曲輪や堀には、近世以降も本丸として機能したことから、築城以来廃城時に至るまでの城中枢部の遺構が累積している。

本丸北側の清海堀は幅が狭く、弧を描く石垣が見られ、複雑で堅固な縄張りとなっており、全国的にも例が少なく岡崎城の最大の見せ場といえる。戦国末期、家康在城時の土で作った堀の形を残して、田中吉政以降は石垣で覆っている。

帯曲輪と繋がる持仏堂曲輪周辺は、改変を受けながらも家康在城時の戦国末期の姿が残されていると評価でき、複雑で堅固な縄張りとなっている。

○現代に残る岡崎城ならではの城郭遺構

天守は、付櫓(二重の井戸櫓と平櫓)をもち、天守台下にL字形の腰曲輪が巡る点で豊臣大坂城の天守台と相似形であり、その姿を残す遺構として貴重である。また、天守台の石垣は一見孕んでいるようにも見えるが野面積みの特性による逆反りである。この逆反りが見られるのは、全国では岡山城、延岡城と岡崎城の3城が代表的である。

天守と持仏堂曲輪をつなぐ堀に掛けた、城から出撃、脱出の時に敵から身を守るための廊下橋は、往時は木橋であったと思われる。現在は明治時代以降に積んだ石橋となっているが、天守と本丸以外の曲輪とが直接つながった廊下橋は、日本唯一のものである。

各時期の城郭整備は、勢力が入れ替わりながら、前勢力の城郭を破壊せず累積的に整備拡張されていったことにより、中世城館を内包した近世城郭となった。

②近世の大城郭維持と岡崎城下の繁栄

○家康生誕城としての特性

徳川家康の生誕城として岡崎藩に封じられる大名は譜代中の譜代であり、松平氏の時代から仕えてきた三河武士の末裔である。岡崎藩主となった大名は、老中や年寄など幕府の要職に任ぜられることが多く、直接幕政に携わる機会が多かった。岡崎藩の場合は藩主家交代も少なく、結果として両本多氏と水野氏、松平氏しか封じられることはなかった。

○水陸交通要衝地として近世の城下繁栄

岡崎城の特徴として、自然地形を巧みに活かし交通・防御の要衝で江戸と上方を結ぶ主要ルートの東海道は城下を通っていた。さらに信州へと向かう矢作川の河川交通も制する場所であり、物資の輸送に矢作川と菅生川（乙川）が利用できた。

主要都市を結ぶ東海道の陸上交通と、三河湾から上ってくる矢作川を利用した河川交通は広い商圈をもった。岡崎城周囲のまちは、中世には矢作宿と結ばれることによりその繁栄を引き継ぎ、近世には城を中心にして城下町が造られ商圈が発達し、岡崎城下は名古屋に次ぐ商業都市となっていた。

岡崎の名産品・主要産物として、矢作川の水運と伏流水を利用した八丁味噌、豊富な花崗岩を使用した燈籠や手水鉢^{ちょうずばち}といった石製品、三河木綿と呼ばれた木綿製品などがあり、遠く江戸や上方へも売られていった。こうして、東海道の宿場としての機能のみならず、商工業の中心としての機能も果たしており、現在でも魚町、材木町など職人町の名残がみられる。

岡崎城の周囲には、徳川将軍家の菩提寺である大樹寺を始めとして伊賀八幡宮、大林寺や松應寺といった松平氏累代ゆかりの寺社が多数ある。これらの社寺は、岡崎城の守りともなり、3代将軍徳川家光の代、寛永年間に手厚く整備された。現在では岡崎の観光名所ともなり、松平氏の勢力拡大から徳川将軍家にいたる趨勢^{すうせい}をたどることができる。

（２）岡崎城跡の価値

岡崎城の価値を構成する要素を、次のように分類する。

①城郭遺構等の城郭としての本質的な価値を構成する要素

○地形を活かし中世から近世にかけ完成された複合的な縄張り

丘陵地の先端部や谷等の自然地形を巧みに利用し、中世的な丸い曲輪や空堀により複雑に構成した縄張りに、近世の石垣や櫓、あるいは平面的な曲輪が融合し完成した縄張りは、岡崎城の大きな特徴である。近世の櫓や城門の数も国内有数の規模を誇った。

○総構えをもつ広大な城郭規模

城郭は総堀や土塁あるいは菅生川（乙川）で外縁を形成する総構えとし、国内有数の規模を誇る広さ（面積約 86ha）をもつ。

②各時代の遺構と遺物等、歴史的な重層性を構成する要素

○各時期に構築された石垣

中世末期の岡崎城築城の特徴である土塁と、それに重なる石垣には、近世を通じて構築、修築された各時期の石垣の構築技法が見られる。

○建造物等について良好な資料が存在

明和 7 年（1770）の藩主交替時の書上文書に、城郭や城内の規模や城門や櫓の規格形状あるいは数量等が詳細に記述され、これは絵図に見られる総構えの規模や城門等の存在を裏付ける記録資料となっている。

○各時代の城郭遺構が遺存

発掘調査を重ね、往時の岡崎城郭の特徴的な姿をとどめる遺構が確認され、江戸時代の絵図に描かれていない戦国時代以前の遺構が新たに確認されるなど、地下遺構が埋蔵された場所が多く残っている。また、旧石器時代から近代の遺物が出土している。

③都市公園等、都市景観や現代的な利用に関する要素

○市中心部の大規模な公共空間

都市公園（岡崎公園）はその殆どが市史跡指定地であるが、一方市の中心に位置する広域避難場所として防災的な機能も持つ。

○市民に親しまれる近代公園

明治 8 年（1896）に公園化され、市民に開放され憩いの場となってきた。大正 6 年（1917）の本多静六博士による岡崎公園設計案は、公園整備の先駆的役割を担うマスタープランとして位置づけられ、岡崎公園の価値を高める要素となっている。

○良好な都市景観の形成

公園内の天守や石垣は都市景観形成要因でもあり、菅生川堤防沿い等からの眺望は良質な景観性能を有している。

○市域の観光の中心的存在

岡崎城天守閣や三河武士のやかた家康館等は市内有数の観光拠点であり、愛知県下を始

め市外からの入場者数も多く、また城内に多数残るサクラは、近辺の菅生川や伊賀川沿いのサクラと相まって名所となり春先の行楽資源ともなっている。

旧東海道二十七曲りは屈曲の多い江戸時代の特徴を残す歴史的な街道であり、歴史的建造物等の往時の面影は少ないが、まちなみ探訪の動線として観光客を引きつける要素がある。

